

千葉日報社長賞

こもだ
薦田 きく

小高倉之助 先生 江 薦田きく

春の波濤は清い松原の梢に響きつつ今日も私達に何かを伝えて来ます。

ちらほら花の噂も聞え五月の文学碑前祭が話題となってまいりました。

先生。思えば、ながらみ第一歌集(昭和四十三年発行)より先生に従いて発行所を背負い乍ら五十年の歳月が過ぎました。教育委員会のご指導で公民館短歌教室となり、一昨年第七集を発行する事が出来ました。

そして、これを機会に先生亡き後三十余年の会長を今月で辞任致す決心に至りました事をご報告させていただきます。

力不足の私は拙い語彙で表現出来ず感謝の心を胸に深く厚く先生に御礼申し上げるのみです。

私は先生の抒情豊かな余韻ある詩心を慕い一宮町に初めて短歌会を設立し、一宮町、長生村、睦沢町と沢山の弟子の育成に盡くされたお力を町に残す一心で今日まで来ましたが力及ばず老いゆく身を悲しく省みています。

私に詩歌は人道に背くなかれ泣くなかれと導かれた人生の辞書でした。

先生の歌碑も文豪芥川龍之介氏の文学碑と共に町の文化を支える碑前祭として町の誇りです。短歌を愛する一人として光栄です。

先生。私もあと二、三年講師として短歌会を護り必ず先生の意味を残して身を引く所存です。

永年本當にありがとうございました。

(千葉県／90歳)